

2-2. 岡崎市

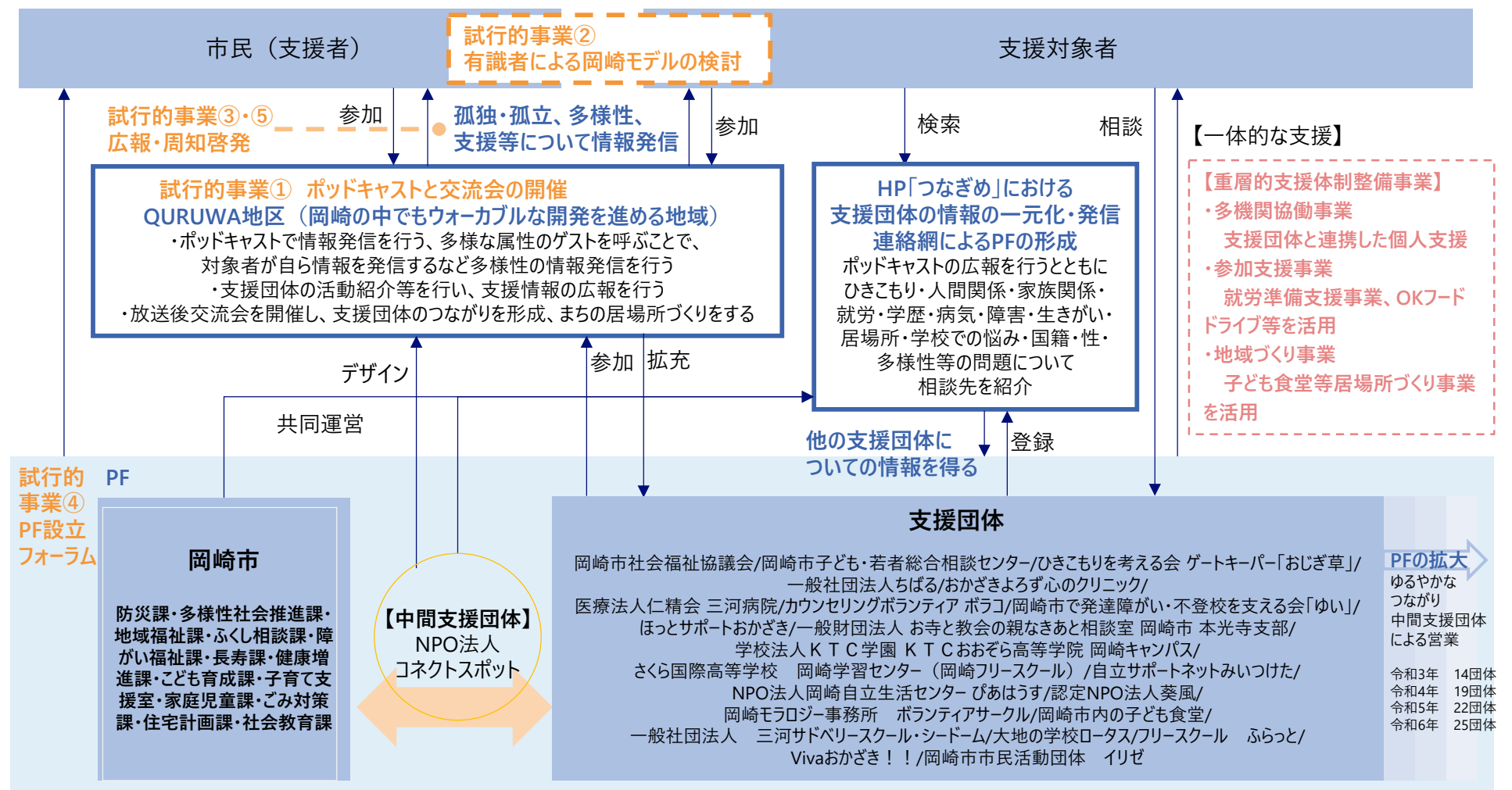
No.	2	岡崎市
-----	---	-----

1. 取組の全体像						
1. 自治体の概要						
①	自治体名	岡崎市		②	担当部局名	福祉部ふくし相談課
③	人口	384,654(人)＜令和2年 10 月/国勢調査＞				
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)		福祉部ふくし相談課		
			庁内連携内 ※会議体、情報共有	・重層的支援体制整備事業に基づく支援会議 ・重層的支援会議		
		庁内連携部局(メンバー)		岡崎市福祉部障がい福祉課、岡崎市保健所 健康増進課、岡崎市子ども・若者総合相談センター(わかサポ)、岡崎市社会福祉協議会		
			庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・多機関協働事業を担うふくし相談課に個別事例に関する相談が来るため、日常的な対話がある		
2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿						
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	・ 令和 3 年度から重層的支援体制整備事業を開始 ・ 令和 4 年度から地域づくりの一環として、地域、地域包括、民生委員・児童委員および支援関係者と個別避難計画作成支援を実施 ・ 令和 5 年 2 月から生きづらさに寄りそうポータルサイト「つなぎめ」を NPO 法人コネクトスポットと共同運営を開始、情報発信を実施 ・ 令和6年1月から住まい連携推進員を配置した住まい支援センターを設置し、居住支援協議会と連携して入居支援と日常生活支援等が一体となった居住支援を実施 ・ まちづくりでは、平成26年のまちづくり構想の提言を起源とする QURUWA プロジェクトでウォーカブルなまちづくりを推進している				
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール		・ ポッドキャストの運営を通して、PF 参画団体が定期的に協働したり、地域市民の方との接点を持てる場をつくる。支援者間の交流の場「あわいスタンド」を開催し、今後の持続可能性を検証する。 ・ ポッドキャストの運営を通じて、孤独・孤立の課題を市民に周知するとともに、多様な市民が認め合うまちづくりを推進する。		
		最終的なゴール		・ PF 参画団体が、詳細な活動内容は違うが、同じ孤独・孤立を課題解決する、仲間であるという認識をもち、連帯感をもって支援に臨める体制を整備する。 ・ 関わったことのない分野や団体を巻き込むことで、把握できていない潜在的な孤独・孤立に陥っている層を掘り起こす。		

3. 地方版連携 PF における連携体制			
①	地方版連携 PF	立ち上げ年度	令和6年度
		参画メンバー	岡崎市社会福祉協議会、「つなぎめ」に登録する支援団体(一般社団法人、医療法人、ボランティア、一般財団法人、学校法人、NPO 法人、こども食堂、市民活動団体など)
		選出・打診時の工夫	民間主体で「つなぎめ」に登録している支援団体 ※参画団体は随時募集しており、試行的事業を通じてつながった団体を追加していく。
②	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	未(※代替あり)
		参画メンバー	※重層的支援体制整備事業における重層的支援会議が協議会の役割を担う。そのため孤独・孤立対策は予防的な観点、潜在層の掘り起こしを担い、支援が必要な対象者を PF メンバーで支援するとともに、必要に応じて、重層的支援会議につなぐ機能を担う。
		選出・打診時の工夫	—
4. PF 連携による価値や工夫_考え方			
- 孤独・孤立の課題解決には、市民に岡崎市には多様な人がいることを知ってもらうことが重要という考えのもと、ポッドキャストによる多様な市民から情報発信を行うことで、孤独・孤立対策を進め、潜在的な孤独・孤立層の掘り起こしを試みる。 - 情報発信をウォークアブルなまちづくりの推進地区において、公開収録型で行うことで、関心を持った市民や支援団体、通りがかりの市民が集う場所をつくり、支援団体同士の定期的な接点づくりや、市民の居場所づくりを併せて行う。また、補助事業終了後も継続的にポッドキャストの運営を行うために支援者間の交流の場「あわいスタンド」を開催し、今後の持続可能性を検証する。そうすることで、将来的には民間による運営を目指す。 - ポッドキャストについては、チラシや運営する NPO の HP を通じて広報を行う。ポッドキャストを通じてつながった支援団体を含めて、支援団体同士が互いを知り、つながるために、HP では支援団体の情報の情報発信も併せて行う。			

2. 連携 PF イメージ

5. 連携PFのイメージ図



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業のポイント・工夫		- ポッドキャストによって、広報と居場所づくり、支援団体同士の交流を一体的に進める。 - 有識者の視点も織り交ぜつつ、市民の生活史から実態把握に取り組む。			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	ポッドキャストと交流会	ポッドキャスト「こどくのあわい」で岡崎市の市民に焦点をあて、市民の生活史を発信することで、視聴した市民が共感したり、その人から見た社会について考える機会を与えることで、地域全体で孤独・孤立対策を推進した。ポッドキャストは公開収録とし、さらに、放送後収録場所において交流会を開催することで、まち中の交流拠点づくりも合わせて行った。ポッドキャストや交流会についての情報発信と支援団体やその活動状況についての情報発信を合わせて HP 等で実施した。	- 市民に対して孤独・孤立対策や市民の多様性について発信すること、誰でも立ち寄れる市民の居場所を作ること。これらにより、潜在的な孤独・孤立を抱える方の掘り起こし、予防的な対策を行う。 - 支援団体同士が定期的に接点を持てる場所をつくり、支援団体のつながり、情報発信の支援を行うこと。	9 月下旬～2 月	コネクトスポット (290 万円)
			成果検証結果 ✓ 11 回の公開収録を行い、のべ 114 名が参加した。公開収録には関係者以外にも学生や一般市民などの来場があった。また、収録後の交流会は支援者同士が交流する機会にもなった。 ✓ 岡崎市民だけでなく、市外の人からもポッドキャストを聴いて、「共感した」といった反響があった。		
②	ポッドキャストの広報活動	ポッドキャストの実施にあたっての広報を行った。具体的にはチラシ、ステッカーを 1,000 部印刷し、岡崎市役所や関係機関、NPO 法人などの PF 参画団体の施設において配布した。	ポッドキャストの周知啓発を行い、視聴者数、公開収録、交流会への参加者数を増やすこと。	9 月	シテン (110 万円)
			成果検証結果 ✓ ポストカード型のチラシ、ステッカーとし、特徴的なデザインとすることで、市役所に配置したのを見た市民から「見たことがある」とコメントをもらうなど、印象付けることができた。		

③	岡崎モデルの検討	- 有識者への委託を行い、先進地や地域内のフィールドワークを行った。結果を踏まえて、岡崎らしさや岡崎ならではの今後の取組について検討整理し、岡崎らしい孤独・孤立対策として PF やポッドキャストの運営の見直しを行う材料として整備した。 - 成果物を使用して、PF 設立フォーラムにおいて朗読を実施することで、来場者の孤独・孤立に対する理解を深めた。	有識者の視点から検討してもらうことで、孤独・孤立やまちづくりにおける岡崎らしさについて把握し、現在の取組の見直しや、次年度以降の取組の検討に活用すること。	9 月下旬～2 月	あさの研究所 (66 万円)
			成果検証結果 ✓ 調査結果を PF 設立フォーラムにて報告するとともに、PF に対して一人一人が社会を変えていく必要性について問題を提起した。 ✓ 今後も調査を拡大しつつ、結果を伝えていくことが必要と示された。		
④	PF 設立フォーラム	市内施設において、PF 設立フォーラムを開催した。支援者、NPO、民生委員等の支援団体を対象に開催し、有識者による講演で孤独・孤立の課題についての理解を広めるとともに、PF のあり方や考え方について支援団体への周知を行った。	- 支援団体の孤独・孤立の課題や PF についての理解を深め、共通認識を持てるようにすること。 - 支援団体同士が一体感をもって支援に臨めるように PF の連帯感を醸成すること。	2 月 21 日 (金)	謝金＋交通費 (13万円)
			成果検証結果 ✓ グループワークの中では、包括支援センターと民生委員がもっと連携できると良いなどの支援者連携についての意見が支援者から発言されるなど、支援者による主体的な意見交換が行われた。		
⑤	孤独・孤立対策のロゴ制作	ポッドキャストとその広報活動によりイメージの周知がなされたことを踏まえ、共通のイメージで行政の孤独・孤立対策を推進するため、統一感のあるデザインで孤独・孤立対策のロゴを制作した。	孤独・孤立対策に一体的に取組んでいるイメージを与えること。	2 月	コネクトスポット (4万円)
			成果検証結果 ✓ ロゴを制作し、ポッドキャストと共通のデザインで制作することで既に広まったイメージを活用した。PF 設立を伝える際に、の HP に掲載した。 ✓ 市職員からは、「岡崎市のイメージと「こどく・こりつ」をかなで表記したデザインは、PF 参加団体も使用しやすく市民が受け入れやすいものとなっている。」といった感想が得られた。		

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举

- ・ つながっている支援団体数は地域内では網羅的になってきたが、今後も少しずつ拡大予定
- ・ 今後は、今つながっている支援団体とのつながりを強化することが課題。緩やかなつながりであることは重要だが、弱くて忘れられるようなつながりではいけないため、HP「つながめ」を“情報を伝えるツール”として頻度高く活用してもらえるツールにしていくとともに、行政が中間支援団体とともに支援団体を訪問するなど積極的に動いていく。

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・ ポッドキャストについては、岡崎市民だけでなく、市外の人からもポッドキャストを聴いて、「共感した」といった反響があった。
- ・ チラシ、ステッカーを特徴的なデザインとすることで、市役所に配置したものを見た市民から「見たことがある」とコメントをもらうなど、印象付けることができた。

4. 連携 PF の行程および実務上の留意点

【PF 立ち上げまでの行程】※令和6年度から孤独・孤立対策を実施

R6 年度	(ア)初期段階	
4月 ～	主担当部署の設定	■分野横断的な窓口をもつ部署が担当
4月 ～	担当者の初動	■PF のイメージについて庁内で共有・確認 ■当初より持っていた課題を孤独・孤立対策の観点で考える
	(イ)準備段階	
4月 ～	地域の現状把握	■中間支援団体と連携し、地域の現状を把握
4月 ～	取組テーマ決定	■中間支援団体と議論し、取組テーマを決定
4月 ～	連携 PF の 企画・設計	■PF の支援団体をつなぐために「つなぎめ」の HP を活用することとした ■市民への情報発信と居場所づくりをポッドキャストで実施することとした
4月 ～	関係団体の リストアップ(庁内)	■庁内では、なんでもありにならないように留意しつつ連携部署とは相互に 協力する関係性を構築
4月 ～	関係団体の リストアップ(庁外)	■当初より HP「つなぎめ」に登録している団体をメンバーとすることとし、登 録団体を庁内のつながりや、中間支援団体の営業によって拡大
9月 ～	地域の現状把握	■有識者と連携して、フィールドワークに基づく現状把握を実施
	(ウ)設立段階	
9月 ～	域内住民・団体への 情報発信	■ポッドキャストのチラシを特徴的なデザインとすることで認知拡大 ■ポッドキャストをアプリで公開し、アーカイブを残す
9月 ～	連携 PF の運営	■市役所と中間支援団体が共同で企画・運営を行う ■ポッドキャストの公開収録と交流会を2週間に1回の開催
	(エ)自走段階	
今後	PF の拡大・活性化	■今後はつながりの強化のために「つなぎめ」の活用促進を進める ■実態調査の結果を市民にも公開し、孤独・孤立対策を考える機会を提供し ていくことも検討

【それぞれの段階での留意点】

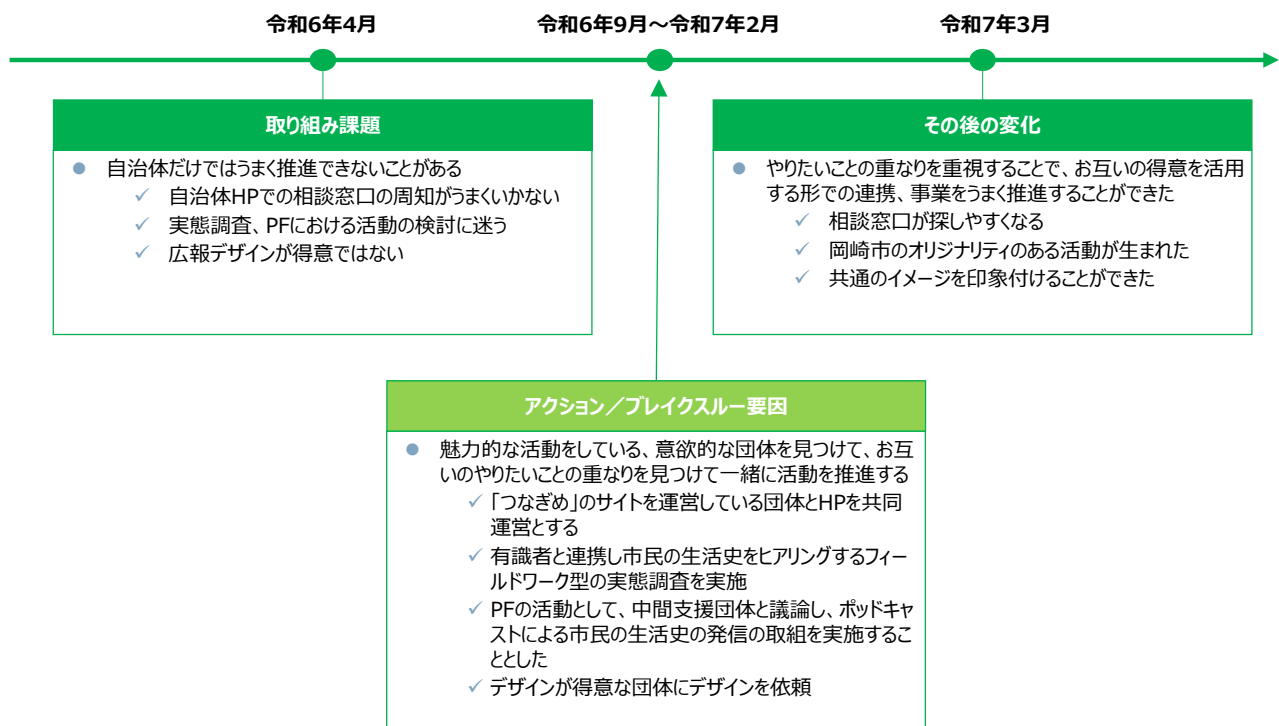
(ア) 初期段階		
①	主担当部署の設定	■分野横断的な窓口をもつ部署が担当 孤独・孤立は分野横断的に動くため、横断的に相談を受け付けるふくし相談課が担当することとなった。
②	担当者の初動	■PF のイメージについて庁内で共有・確認 - PF については、支援団体同士がつながる、連携を強化するという目的や、会議体を新たに設けるものではないというイメージが職員の中で共通にあった。 ■当初より持っていた課題を孤独・孤立対策の観点で考える - 相談受付において、もっと早く相談窓口を見つけられる環境が必要であるが、行政の HP は“求めるものが明確ではないと適切な窓口を見つけられない”という情報発信への課題意識があった。

(イ) 準備段階		
③	地域の現状把握	■中間支援団体と連携し、地域の現状を把握 - 当初の活動でもある程度は把握できていたが、中間支援の役割をする団体と連携することでさらに多くの課題を把握することができた。 ■有識者と連携して、フィールドワークに基づく現状把握を実施 - 実態調査を実施するにあたり、有識者に手法を相談した。有識者から、フィールドワークを行い、市民の実態、特に市民一人ひとりがもつ周辺社会を把握し、共有する手法を提案してもらい、有識者と共に実施した。
④-1	取組テーマ決定	■中間支援団体と議論し、取組テーマを決定 (令和 6 年 4 月)重層において居場所づくりや地域づくりまで実施しているなかで、孤独・孤立についてはより予防的な活動を検討。官民連携においては両者がやりたいことの重なりを重視し、支援団体同士をつなぐ中間支援団体と議論し、「つなぎめ」サイトの活用やポッドキャストでの孤独・孤立対策のアイデアを得て実施することとした。
④-2	連携 PF の企画・設計	■PF の支援団体をつなぐために「つなぎめ」の HP を活用することとした 「つなぎめ」のサイトをすでに運用しており、「つなぎめ」を起点として、支援団体同士の情報連携、支援団体の情報収集の場としていくこととした。 ■市民への情報発信と居場所づくりをポッドキャストで実施することとした - ポッドキャストにより、市民への情報発信を行うとともに、実施後の交流会で支援団体同士のつながりづくりができるようにする。
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	■なんでもありにならないように留意しつつ連携部署とは相互に協力する関係性を構築 重層よりも枠組みが広いので、なんでも孤独・孤立と言ってしまうが、単なる人が集まるイベントにならないように庁内連携においては留意し声掛けをした。福祉分野以外でも多様性社会の実現を目指す部署等には声掛けをした。お互いの企画するイベントには参加するなど庁内でも関係性を構築している。
		■当初より HP「つなぎめ」に登録している団体をメンバーとすることとし、登録団体を庁内のつながりや、中間支援団体の営業によって拡大 (令和 3 年～)登録団体の拡大については、中間支援団体の営業活動で拡大している。HP「つなぎめ」に登録した団体をメンバーとして PF を立ち上げた。 (令和 3 年～)行政からも各担当課に「つなぎめ」に登録すべき団体を募集し、各課つながりのある機関を整理した。

(ウ)設立段階		
⑥	域内住民・団体への情報発信	■民間が運営していた HP を共同運営する形で情報発信を実施 ・（令和 3 年）課題意識のあった情報発信については、わかりやすい情報発信をしている「つなぎめ」を見つけ、コネクスポットに声掛けをし、共同運営を開始。 ■ポッドキャストをアプリで公開し、アーカイブを残す ・ポッドキャストはアプリでいつでも誰でも聞けるように公開し、アーカイブを残している。 ■ポッドキャストのチラシを特徴的なデザインとすることで認知拡大 ・デザインが得意な団体に依頼し共通デザインを制作。活動に一体感を出すとともに、「見たことがある」と印象付けることができた。
⑦	連携 PF の運営	■「つなぎめ」のサイトは行政と中間支援団体の官民共同運営 ・「つなぎめ」のサイト上での情報連携や支援団体同士が情報を知り合える場として活用を促していく。 ■ポッドキャストの公開収録と交流会を2週間に1回の開催 ・共感を生むことでつながりを感じることができるツールとしてポッドキャストでの情報発信、居場所づくりを継続する。

(エ)自走段階		
⑧	地域協議会の設置	■地域協議会の機能は重層の支援会議が担う ・重層的支援体制整備事業における重層的支援会議が協議会の役割を担う。そのため孤独・孤立対策は予防的な観点、潜在層の掘り起こしを担い、支援が必要な対象者を PF メンバーで支援するとともに、必要に応じて、重層的支援会議につなぐ機能を担う。
⑨	PF の拡大・活性化	■今後はつながりの強化のために「つなぎめ」の活用促進を進める ・つながっている支援団体数は地域内では網羅的になってきたが、今後も少しずつ拡大予定 ・今後は今つながっている支援団体とのつながりを強化することが課題。緩やかだが、弱くて忘れられるようなつながりではいけないため、「つなぎめ」を情報を伝えるツールとしても活用することで利用を促進し、行政が中間支援団体とともに支援団体を訪問するなど積極的に活性化を図る。 ■実態調査の結果を市民にも公開し、孤独・孤立対策を考える機会を提供していくことも検討 ・市民ひとりひとりが地域社会のあり方を考え直す機会となるように、生活史の調査も継続し、実態を地域で可視化することも検討していく。

ブレイクスルー要因	
アクション/ ブレイクスルー要因	■自治体だけでなく、民間の得意に頼る ・ それぞれ行政、民間に得意なことがあるため、自治体においてうまく推進できないことについては、検討段階から民間や有識者に相談し、議論しつつ実施事項や方針を決める。 ・ 民間団体に対しても押し付けるわけではなく、民間団体の“得意なこと”や“やりたいこと”を聞き取り、同じ目的で進められる“やりたいこと”の重なりを見出して、連携体制を構築する。 ・ 今回のモデル事業以前から、自治体のHPではうまく支援情報を伝えられない課題に対して、HPでわかりやすく情報を発信している中間支援団体を見つけ、HPの共同運営を行うこととするなどの取組を実施。 ・ 今回の実態調査やポッドキャストについても民間団体や有識者と連携し、議論する中でオリジナリティのある取組を行うことができた。 ・ 広報デザインについても、まちづくりに取組むデザインを得意とする企業と連携することで、印象に残る共通のイメージを作成することができた。



コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

NPO法人 コネクトスポット

- ・ 岡崎市において、支援団体の情報を集約する HP「つなぎめ」を単独で立ち上げ、運営。支援団体のコーディネーター、中間支援団体として活躍。当事者が迷わずに支援にたどり着けるよう支援情報を発信、適切な支援につなぐなど支援団体同士の横のつながりづくりも支援する。岡崎市からの声掛けを受けて、「つなぎめ」を共同運営するようになる。
- ・ 今回のモデル事業では、ポッドキャストによる情報発信、居場所づくりを岡崎市とともに企画。代表の山下氏は公開収録の会場であるマイクロホテルアングルの飯田氏とともにラジオのパーソナリティ、運営を担う。

📍 草の根の支援団体をつなぐポータルサイト、コーディネーターの必要性

- ・ 小さな支援団体は日々活動や存続を守ることです。そのため、ポータルサイトがほしいと思っても単体では立ち上げられないケースが多い。また、ポータルサイトがあることで、小さな団体は対象者に安心感を与えられるメリットがある。行政が実施するニーズはあると思う。
- ・ また、支援団体単体では適切な支援につなぐことができなかったり、最悪の場合対象者の取り扱いや囲い込みが発生したりする可能性もある。コーディネーターや中間支援団体の役割は重要である。

📍 デザインの力をつかってまちに出ていく

- ・ 精神科や相談窓口はまだ特別なところであり、メンタルケアはまちの中でできると良いと考えている。まちの中に出ていくためには、工夫が必要と考え、デザイナーと組んで仕事をしている。想いを伝えられるように文章におこして、プロのデザイナーにビジュアルに起こしてもらうことで、マーケットに活動を伝えることができる。まちなかのメンタルケアにもなるようなデザインのショップカードを配布している。おしゃれで目を引くデザインにすることでカフェにも置いてもらえるようになった。

📍 PF の推進においては、共通で向き合う課題が必要

- ・ 支援者は多忙で集まる場にはなかなか来てもらえない。場に来てもらうにはインセンティブが必要で、単なるフォーラムや会議には参加したいとは思わない。PJT 型で共通で向き合う課題があって、行政と連携することで共感を持てる課題の解決につながる議論・活動ならば対話したいと思う。
- ・ 支援団体としても、行政だけで課題を解決しなくてもいいと思っている。企画段階など早めに対話することが重要。困難になってから相談されても対応できない。空き家対策などお題は福祉以外でもよく、行政が投げかけた問に対して、PF みんなで考えていけると良いのではないかな。

📍 行政の強みは地域全体への発信力と住民とのつながり、信頼性、お互いの強みを活かせる連携方法を

- ・ 行政は市民の情報を持っており、地域全体に発信する力を持っている点は強みである。また、行政と連携することでお墨付きがもらえ、信頼性があがることも民間団体にとってはメリットである。
- ・ 一方で、目の前の人を守るために日々誇りをもって活動しているため、行政の下請けとして行政の指示を受けて活動を制限される可能性を危惧し連携に抵抗がある団体もある。委託事業としてしまうと発注者と受託者という関係性になるため、連携方法をよく検討する必要がある。
- ・ それぞれの強みを活かした活動が検討する際には、行政と民間という立場ではなく、「僕」と「あなた」で「なんのために」「なにをするのか」を議論することで、目的にあった取組を考えることができる。考えたものに対して何が足りないのか、本当にお金が必要なのかを後から考える方が良い。



官民連携の形に明確な答えはなく、
地域の数だけ形があると感じます。
他の事例を参考にしつつも
自分たちが持つユニークさを追求し、
それを活かした連携を
これからも模索し続けていきたいと思います。

NPO 法人コネクトスポット
代表 山下祐司

5.自治体等との打合せ記録一覧				
No.	日時	打合せ相手団体	出席者 打合せ相手	NRI
1	8/5(月) 10:00-11:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	生駒、橘、山崎
		NPO 法人 コネクトスポット	山下様	
2	9/5(木) 16:00-17:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	生駒、橘、 山崎、小田
3	10/30(水) 14:00-15:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	生駒、橘、小田
4	10/31(木) 18:00-19:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	生駒、橘、小田
		NPO 法人 コネクトスポット 合同会社 シテン	山下様 飯田様	
5	1/14(火) 09:00-10:00	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	生駒、橘、 山崎、小田
6	2/4(火) 13:00-15:00	NPO 法人 コネクトスポット	山下様	橘、小田
7	2/4(火) 15:30-17:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	橘、小田
8	2/12(水) 15:00-17:00	愛知学泉大学	古橋様	橘、小田

自治体による従前からの取組

■ 孤独・孤立対策支援ポータルサイト「つながめ」の共同運営

(取組概要)

令和3年度より孤独・孤立の問題に悩む人が容易に相談先などの情報を収集できるように、福祉サービスの統一的なポータルサイトとして「つながめ」をNPO法人コネクトスポットと共同運営している。

図表「つながめ」トップ画面



(出典:<https://tunagime.jp/>)

図表「つながめ」支援検索画面



(出典:<https://tunagime.jp/supporter/>)

試行的事業	
① ポッドキャストと交流会	
概要	ポッドキャスト「こどくのあわい」では、毎回市民や支援者をゲストに呼び、その人のこれまでの人生やその時の思いについてラジオ形式で発信する。誰かの生活史を発信することで、視聴者が共感し、勇気をもらったり、社会について考えたりする機会を提供することで、地域全体での孤独・孤立を予防していくことを目指す。
ねらい	孤独・孤立対策や多様性、誰かの生活史を発信することで、孤独・孤立対策の認知拡大だけでなく、潜在的な孤独・孤立を抱える人やその隣の人に勇気を与えたり、支えになったり、少し考えてもらうきっかけにもらえるように設計した。
工夫点	- 音声のみのラジオとすることで、負担感を軽減し、継続性を高めた。また、ゲストが匿名で登場することもできる設計とした。 - 公開収録の形式をとり、収録後に交流会を開催することで、まち中の交流拠点づくりを行った。
結果	11回の公開収録を行い、のべ114名が参加した。公開収録には関係者以外にも学生や一般市民などの来場があった。また、収録後の交流会は支援者同士が交流する機会にもなった。 - 岡崎市民だけでなく、市外の人からもポッドキャストを聴いて、「共感した」といった反響があった。

(実施概要)

Spotify のアプリで聴けるポッドキャストで、ラジオ形式で収録した音声を配信している。顔出しをしないラジオ形式とすることで、動画配信よりも負担を減らして、継続的に実施できるように工夫した。

メインパーソナリティは、NPO 法人コネクトスポットの山下氏と開催拠点であるマイクロホテルアングルの飯田氏で、毎回岡崎市民を中心に多様なゲストを呼び、その人のこれまでの人生“生活史”について話す。

ゲストに生活史としていままでの人生やその時の思いを振り返って話してもらうことで、視聴者の共感と呼び、誰かの勇気や支えになる。また、その人の目線での社会をみんなで共有することで、社会のあり方について視聴者が考え、孤独・孤立を生みにくい社会についてみんなで考えるきっかけとなる。開催結果は「つなぎめ」のサイトで報告、紹介している。

公開収録を、岡崎市のウォーカブルなまちづくりを推進する QURUWA 地区の一角で行うことで関心を持った市民や通りがかりの市民、支援者などが自由に立ち寄ることができる交流拠点づくりも併わせて行う。公開収録後は「あわいスタンド」として交流会を開催する。

図表 公開収録の風景



図表 収録の記録

回数	日付	ゲスト
#0	9月26日	岡崎の孤独の調査に取り組む愛知学泉大学の古橋敬一氏
#1	10月10日	人生で3ヶ月以上、岡崎を離れたことのない方
#2	10月31日	長年続く洋菓子屋岡崎の洋菓子屋さんに嫁いだ方
#3	11月14日	岡崎で長年続く石屋で石造りに取り組む四代目の職人さん
#4	11月21日	岡崎の山間部、額田で酒蔵を営んでいる方
#5	12月12日	岡崎で家族でぶどう園を営んでいる方
#6	12月19日	岡崎で20年以上、建築現場に関わってきた大工さん
#7	1月9日	岡崎で10年間、ママさんの産前産後の暮らしをサポートしてきた方
#8	1月23日	岡崎で16年、ベーコンやハムなどの手作り店を営んできた方
#9	2月13日	10年以上勤めた会社から独立・起業し、山間部の課題解決に取り組む方
#10	2月27日	岡崎でフランス流の食堂を営む方

企画者の意図

“ありのままでいい”ことをメディアで発信することで、みんなでいいまちをつくっていく

自殺相談などはすぐに対応が必要で、窓口や居場所が必要になるが、孤独・孤立対策では、グレーゾーンの人、すぐには相談に来ない人たちへのアプローチが必要だと考えた。メディア事業を担う自分たちならばできることとして、孤独・孤立は悪いことではなく、そのままでいい、ありのままでいいことを発信するメディアがあれば、誰かの勇気や支えになれるのではないかと考え今回のポッドキャストでの発信を考えた。当事者には届かなくてもその隣の人に伝えられれば少しずつありのままを認められる社会がつかれる。短期的に目に見える効果が見えるものではないが、重要な取組であると考えている。

② ポッドキャストの広報活動	
概要	ポッドキャストの実施にあたり、広報活動としてチラシとステッカーを 1,000 部印刷し、岡崎市役所や関係機関、NPO 法人などの PF 参画団体の施設で配布した。
ねらい	- ポッドキャストの周知啓発を行い、視聴者数、公開収録、交流会への参加者数を増やすこと。 - 岡崎市の孤独・孤立対策を広く周知していくこと。
工夫点	絵葉書のような特徴的なデザインで、説明は裏面に記載することで、福祉関係の施設以外にも置いてもらいやすく、思わず手に取りたくなるようなポストカード型のチラシと、共通のデザインのステッカーを制作した。
結果	ポストカード型のチラシ、ステッカーとし、特徴的なデザインとすることで、市役所に配置したものをみた市民から「見たことがある」とコメントをもらうなど、印象付けることができた。

チラシはポストカードサイズで、表面にはタイトルとイラストのみのデザインとなっており、ポップなデザインでカフェ等においても違和感がなく、手に取りたくなるように工夫されている。ポッドキャストの画面でも同一のデザインが表示される。裏面には、ポッドキャストの説明として「孤独感にそっと寄り添う」メッセージを記載し、ポッドキャストへのアクセス用の QR コード、収録を行う場所を記載している。ステッカーもチラシと同じデザインとなっている。

図表 チラシのデザイン(表面)



図表 チラシのデザイン(裏面)

こどくのあわい

岡崎という街の生活史

このラジオでは、岡崎という街で暮らす様々な人たちの物語を通じて、
私たちが抱える孤独感にそっと寄り添っていきます。

この街には、いろいろな背景を持つ人が暮らしています。

年齢、性別、職業、心身の状態が違うそれぞれの人々が、
岡崎という場所でどのように生きてきたのか。

その生活の中には、嬉しかったこと、悲しかったこと、
どうしようもない孤独を感じた瞬間があるでしょう。

私たちは、その人たちの話に耳を傾けることで、
この街が持つ多様な姿に気づくことができるかもしれません。

そして、それが少しでも、
あなたが感じている孤独を和らげるきっかけになればと思っています。

主催 岡崎市役所ふくし相談課 / 受託 コネクトスポット / 企画 合同会社シテン

話を聞く人
NPO 法人
コネクトスポット代表
山下祐司
合同会社シテン代表
飯田圭

話をする人
岡崎市に暮らすあの人

収録地
Micro Hotel ANGLE

ラジオを聴く



つながめを知る



図表 ステッカーのデザイン



③ 岡崎モデルの検討	
概要	愛知学泉大学の古橋敬一氏と連携し、フィールドワークによる実態調査を行った。手法として、インタビューを軸にした質的調査を行うことで、現代的な「孤独・孤立」の実態を把握し、対象者の視点から見た岡崎市を把握、整理した。
ねらい	対象者へのヒアリングを実施し、有識者の視点から整理してもらうことで、現代の孤独・孤立の実態やまちづくりにおける岡崎らしさを把握し、現在の取組の見直しや、次年度以降の取組の検討に活用する。
工夫点	- アンケート調査による定量的なデータでは見えてこない、個人を取り巻く社会の様子を知ることができる手法を採用したこと。 - 手法の検討段階から有識者と相談し、連携して調査を実施した。
結果	- 調査結果を PF 設立フォーラムにて報告するとともに、PF に対して一人一人が社会を変えていく必要性について問題を提起した。 - 今後も調査を拡大しつつ、結果を伝えていくことが必要と示された。

(実施概要)

アンケート調査等の従来の実態調査では、社会の視点から支援対象である孤独・孤立の当事者の定量的な情報を把握する。一方で、今回の調査では、誰でも孤独になるタイミングがあるという前提のもと、いち市民の目線からその状況や思い、周りの社会を把握することで、現代の孤独・孤立について把握することを試みた。結果を踏まえて、岡崎らしさや岡崎ならではの今後の取組について検討整理し、岡崎らしい孤独・孤立対策として PF やポッドキャストの運営の見直しを行う材料として整備した。

図表 調査手法の違いのイメージ



調査の実施記録は以下の通り

図表 調査の記録

区分	回数	調査内容
県外視察	1 回	1 月 17 日に静岡県浜松市にある NPO 法人クリエイティブサポートレッツ(以下、レッツ)を視察訪問し、その結果を報告書として取りまとめた。視察の結果として、支援ありきではなく、支援する側の自己変革の機会として社会としての私たち一人ひとりが変わることが求められているといった考察がなされた。
岡崎市内の視察	13 回	13 名の人々にインタビューを実施し、それぞれの結果を要約、報告書として取りまとめた。ニーズを丁寧に把握することの重要性が示されるとともに、孤独・孤立に対して問題解決としてのアプローチだけでなく、当事者、支援者、その他の関係者がフラットにネットワークを広げて、社会の制度やシステムの欠陥を埋めつつ社会のあり方を考え直すというアプローチの必要性が示唆された。
コミュニティラジオへのアドバイス	5 回	支援ありきではない当事者、支援者が気軽に情報に触れ、主体的にネットワークにアクセスできるプログラムとして、ポッドキャストの取組が評価された。

④ PF 設立フォーラム	
概要	市内施設において、PF 設立フォーラムを開催した。
ねらい	支援団体が孤独・孤立の課題や PF についての理解を深め、共通認識を持つこと。また、支援団体同士が一体感を持って支援に取り組めるように、PF の連帯感を醸成すること。
工夫点	支援者や NPO、民生委員等の支援団体を対象に、有識者の講演を通じて孤独・孤立の課題についての理解を広め、PF のあり方や考え方を周知した。
結果	グループワークの中では、包括支援センターと民生委員がもっと連携できると良いなどの支援者連携についての意見が支援者から発言されるなど、支援者による主体的な意見交換が行われた。

(実施概要)

開催概要は以下のとおりである。

【日付】令和7年 2 月 21 日(金)

【場所】岡崎市康生通西4丁目71番地 図書館交流プラザらば ホール

【参加者】岡崎市の PF 参画団体、岡崎市内の支援関係団体

【目的】

- ・岡崎市の孤独・孤立対策官民連携 PF が設立されたことを周知すること
- ・PF 参画団体が孤独・孤立についての理解を深める機会をつくること
- ・PF 参画団体がつながるきっかけをつくること

【内容】

時間	内容			
14:00	オープニングアクト	講演者	舞台俳優	三村 聡 氏
14:10	オープニングトーク	講演者	NPO 法人 コネクトスポット 理事長	山下 祐司 氏
14:15	実践発表1	講演者	一般社団法人 Mi-Project 代表	松村 大地 氏
14:30	実践発表2	講演者	キッチンカー 「蟬(せみ)」代表	安藤 梢 氏
14:45	PF 交流会説明	説明	合同会社シテン 代表社員	飯田 圭 氏
14:50	PF 交流会①	ファシリ テーター	一般社団法人 Mi-Project 代表	松村 大地 氏
			厚生労働省社会・援護局地域福祉課 地域共生社会推進室支援推進官	犬丸 智則 氏
			NPO 法人 コネクトスポット 理事長	山下 祐司 氏
			合同会社シテン 代表社員	飯田 圭 氏
			岡崎市	永田 享之 氏
15:10	休憩・移動			
15:15	実践発表3	講演者	厚生労働省社会・援護局地域福祉課 地域共生社会推進室支援推進官	犬丸 智則 氏
15:30	PF 交流会②	ファシリ テーター	※交流会①と同一	
15:50	エンディングアクト	講演者	舞台俳優	三村 聡 氏

三村 総 氏による舞台公演



三村氏によるオープニングアクトでは、星野源氏の入院時代の一説を引用し、病床に倒れて誰に会っても劣等感を感じて孤独になってしまう自分が、自分のことを知らない、一生会うこともない SNS 上の新しい友人との SNS 上のほんの少しのやり取りでつながりを感じることができたエピソードを芝居として上演することで、フォーラムの内容に来場者を引き込み、“つながりとはなにか”を考えさせるきっかけをつくっていただいた。エンディングアクトでは、岡崎市が試行的事業で実施した孤独の実態調査「岡崎の孤独に会いに行く」の一部と、調査を実施した古橋氏の考察を朗読した。ヒアリングを受けた方の「僕って孤独なんですか？」や「時間の進み方が違うのかなど」などの本人目線での言葉とその方から見た社会を知ることで、来場者が自分を含めた社会のあり方を考え、それぞれの人生を尊重し、互いに応援し、支えあうつながりの重要性について伝えていただいた。

一般社団法人 Mi-Project 代表 松村 大地 氏による講演



松村氏が実践する多様な居場所づくりの事例として「鉄塔の下倉庫」や「駄菓子ばあひまわり」を紹介し、地域に開いて、地域住民がつくる居場所づくり、当事者が自分もここにいてよいと思える多様な居場所の重要性を伝えていただいた。多様な居場所づくりのきっかけや途中経過を紹介いただくことで、支援団体においても参考になる工夫点を多く紹介いただいた。

キッチンカー「蟬(せみ)」代表 安藤 梢 氏による講演



本人の結婚、流産、闘病の経験を踏まえて、自身が感じた孤独やそれ乗り越えられたエピソードを伝えていただき、その経験から必要だと思い始めたがん患者のための居場所づくり、コミュニティづくりについて、当事者だからこその居場所に求めることを紹介していただいた。居場所づくりをする支援者としてだけでなく、当事者としての想いやエピソードを伝えていただくことで、支援者が独りよがりにならずに当事者目線での居場所づくり、支援が重要であることが伝えられた。想いのこもった講演に会場では涙を流す人が多くいた。

厚生労働省社会・援護局地域福祉課 地域共生社会推進室支援推進官 犬丸 智則 氏による講演



当事者にとっての居場所は人それぞれで異なるため、居場所の形はツールにすぎず、多様な居場所が存在することが重要であることを講話いただいた。居場所は困ったときに行くのではなく、気づけばそこにあって、普段からそこにいてよい、落ち着けると思える場所やものであり、多様な居場所があるためにはそれぞれ自身が起点となって居場所をつくっていくことが重要であると事例を交えて紹介いただいた。

交流会においては、各テーブルにファシリテーターが入り、「孤独・孤立とは何か」、「どんなことが必要か」、「私たちに何ができるか」などのテーマで、参加者同士が対話を行った。参加者からは、「つながりが重要である」といった意見や、「支援者同士が協力することが必要」といった意見が出された。

図表 交流会の様子



令和6年11月吉日

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2
大手町フィナンシャルシティグランキューブ
株式会社 野村総合研究所

「岡崎市 孤独・孤立対策 PF 設立フォーラム（仮称）」における
ファシリテーションの依頼について

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素より格段のご高配を賜り、
厚く御礼申し上げます。

このたび、岡崎市では、内閣府の地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム推進事業
を実施しております。その一環として、孤独・孤立の問題について、支援者同士がつながり、孤
独・孤立の理解を深めるとともに、広く岡崎市民に対し孤独・孤立対策の推進を周知していくた
めの、「岡崎市 孤独・孤立対策 PF 設立フォーラム（仮称）」を開催いたします。つきましては、
上記フォーラムにおける交流会のファシリテーションをお願いいたします。

記

- 1 「岡崎市 孤独・孤立対策 PF 設立フォーラム（仮称）」における
交流会のファシリテーション
- 2 開催日時：令和6年2月21日（金）14:00～16:00
- 3 場所：岡崎市康生通西4丁目71番地 図書館交流プラザリぶら ホール
- 4 謝金：謝金単価 11,400 円×2時間 22,800 円
- 5 担当者連絡先
株式会社 野村総合研究所 社会システムコンサルティング部
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-3
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ
電話番号： e-mail：

⑤ 孤独・孤立のロゴ制作	
概要	ポッドキャストとその広報活動によりイメージの周知がなされたことを踏まえ、共通のイメージで行政の孤独・孤立対策を推進するため、統一感のあるデザインで孤独・孤立対策のロゴを制作し、岡崎市の孤独・孤立対策を発信するアイコンとして使用することとした。
ねらい	孤独・孤立対策に一体的に取り組んでいるイメージを与えること。
工夫点	- ロゴ制作において、共通のイメージで行政の孤独・孤立対策を推進するため、統一感のあるデザインとした。 - 岡崎市の孤独・孤立対策を発信するアイコンとして使用することとした。
結果	- ロゴを制作し、ポッドキャストと共通のデザインで制作することで既に広まったイメージを活用した。PF 設立を伝える際に、の HP に掲載した。 - 市職員からは、「岡崎市のイメージと「こどく・こりつ」をかなで表記したデザインは、PF 参加団体も使用しやすく市民が受け入れやすいものとなっている。」といった感想が得られた。

ポッドキャストと共通のデザインでの岡崎市の孤独・孤立対策のアイコンを制作し、「つなぎめ」のサイトで岡崎市の孤独・孤立対策官民連携 PF の設立を発信、アイコンを掲載し、イメージを普及した。サイト上では、参画団体の一覧も閲覧可能。ポッドキャストの情報発信、報告も合わせて実施することで情報を一元化している。

図表 制作したロゴ

